

助成年度：平成 11 年度

[所属] 東京学芸大学 教育学部
[役職] 助教授
[氏名] 小川 潔

[課題]

南関東におけるタンポポ在来種・外来種の交代現象

－20 年目調査による推移の検討－

[内容]

2000 年春のタンポポ調査は、6 団体および 116 名の参加協力者を得て、東京都・神奈川県境と多摩丘陵を中心とする南多摩地域で実施した。調査の有効地点数（調査票数）は 1654、原則 16 地点でつくる 2km 四方の区画にすると 107 となった。

区画内の勢力比平均の分布はこれまでの調査と同様に、「外来種が多い」、「外来種のみ」あわせて 84.1%と、外来種が地理的には圧倒的優位さを示した。1980 年、90 年調査との共通区画 94 について比較すると、外来種の相対的勢力は 80 年に比べ 90 年に増大し、2000 年にはやや退潮となった。在来種は 90 年に衰退したが、2000 年にはやや回復気味となった。

ところで、全調査地点の集計から得られる出現頻度で見ると、混生を含め、外来種は 80 年以降徐々に減少し、在来種は 90 年に 27.4%から 13.3%に半減した後、2000 年には 16.9%とやや回復していた。両種の勢力比変化はもっぱら、在来種の増減の結果として決まり、外来種による在来種の駆逐ではないことが明らかとなった。また、調査地点の土地利用形態の変化としては、都市施設の増加、あき地等の減少、および農業用途地の減少停止が特徴であった。在来種は個人の庭を除き、路傍など都市的土地利用形態への進出傾向も見られた。在来種の回復傾向には、多摩ニュータウンの開発が一応落ち着いて、生育拠点である農業用地の減少停止により減少に歯止めがかかり、新設の土地利用が安定し攪乱の程度が緩和された路傍や土堤などへ、残存緑地の種子供給源からの進出があったためと考えられる。